

子どもの成長祝い

人は誕生から死を迎えるまで、様々な人生儀礼を行います。特に子どもの魂は不安定なものと考えられ、その健やかな成長を願って様々な儀礼が行われてきました。この展示では、八代で子どもの成長祝いに用いられた一間羽子板と幟旗を紹介します。

一間羽子板～女の子のお祝い～

子どもが生まれて初めて迎える正月を初正月と言います。初正月には親戚や知人から、男の子には破魔矢と弓、女の子には羽子板を贈り、健やかな成長を願う風習がありました。

八代地方では、昭和 30 年頃まで一間羽子板と呼ばれる大きな羽子板が贈られていました。一間羽子板は床の間などに飾られ、子どもが結婚する時には針箱や下駄箱に作り替えて嫁入り道具の一つとして持たせたといえます。

現在、本町にある大岡玩具店で一間羽子板が製作・販売されていたことが分かっています。

※一間羽子板の「一間」は、cmになおすと約 1.8mになります。しかし羽子板は材木を縦に伐ったものを使いますので、実際の大きさは様々です。おそらく、一間もあるほど大きいという意味で一間羽子板と呼ばれたのでしょう。

羽子板の主な材料は、加工しやすいモミの木(杉も使われました)です。下地を塗り、その上に松竹梅や鶴亀などおめでたい絵柄を描きます。さらに押し絵※を中央につけたものが一間羽子板のオーソドックスな形です。戦後は、下地に鮮やかな赤いエナメル絵の具を塗ったものが作られるようになります。

※押し絵…人間や動物の形を厚い紙で切り抜き、綿でふくらみを付け、布でくるんだ細工。



← 白く塗った下地に松や梅などの絵柄を描き、中央に押し絵が付いたオーソドックスなもの。



← エナメル絵の具を使用したもの。戦後作られるようになりました。



一間羽子板で作った針箱

幟旗・矢旗～男の子のお祝い～

子どもが生まれて初めて迎える節句を初節句と言います。女の子の節句は3月3日の上巳の節句とされ、母親の実家や親せきからひな人形が贈られます。男の子の節句は5月5日の端午の節句とされ、鯉のぼりや幟旗・矢旗が贈られるのが一般的となっています。

八代地方でも、端午の節句には家の門に勇ましい武者絵が描かれた武者絵幟や、子どもの名前を染めた名前旗、鯉のぼりが飾られている様子を見ることが出来ます。

もともと男の子の行事ではなかった！？

端午の節句はもともと、疫病が流行りやすい夏を迎える前に菖蒲(しょうぶ)を飾ったり身につけたりすることで、邪気や災厄を払う行事でした。民間では田植え前の時期にあたるため、女性が稲の豊作を願う行事が行われました。

男の子の行事となったのは江戸時代中期頃からです。近世武家社会で菖蒲が尚武(しょうぶ=武道、武勇を重んじること)に通じるとして兜や鎧を飾る風習が生まれ、江戸時代になって幟や武者人形を飾って男の子の健やかな成長を祈る日として定着しました。

使用後の幟旗は、健康に育つようにと祈りを込めて、子どものかけ布団カバーなどに作り替えられました。



表面



裏面

幟旗で作られた布団カバー。
右側が上杉謙信と武田信玄、左側が宇治川の戦いを描いた幟旗が使われている。